

〔年中行事歌合〕五十番 右 大唐商客

女房

我國のみつぎそなへて年毎に今もくだらの舟ぞ絶えせぬ

〔續日本後紀^八〕承和六年七月丙申、令太宰府造新羅船、以能堪風波也。

〔續日本後紀^九〕承和七年九月丁亥、^五太宰府言對馬島司言、遙海之事、風波危險、年中貢調、四度

公文、屢逢漂沒、傳聞新羅船能凌波行、望請新羅船六隻之中、分給一隻聽之。

〔和漢船用集^三〕唐船 中華の舟を云、今長崎にても南京船を云、謠の題號にあるも、明州

の舟なり、源平盛衰記に、大將は唐船に乗たまへるよしいへり、是は唐船造りに乏たるを云か、今

も御公儀の御船、長崎に唐船作りの御舟あり。

〔竹取物語〕右大臣安陪のみうしは、財ゆたかに、家ひろき人にぞおはしける、其年渡りけるもろこ

し。船のわうけいといふ人のもとに、文をかきて、火鼠のかはごろもといふなるもの、買ておこせ

よとて、つかうまつる人の中に、心たしかなるものをえらびて、小野のふさもりといふ人を付て

つかはす。

〔高倉院嚴島御幸記〕福原より、けふ^三治承四年^四よき日とて、舟にめしそむべしとて、唐の舟まいら

せたり、まことにおどろしく、晝にかきたるに違はず、たうじんぞつきて参りたる。^中廿一

日、^中福原の入道^{清盛}は、からの舟にてぞうみよりまいらる、

〔教言卿記〕應永十五年三月八日丁巳、行幸北山殿、廿日己巳、今夕三席御會也、唐船管絃、御座船也、

〔享保集成絲綸錄^{四十二}〕寛文十一亥年七月

唐船作之御船、江戸より西國筋迄、浦々にて風波之節は、見當次第船を出し、破損無之様に精を入

べし。

〔和漢船用集^五〕^{舟名數江湖川船}御座船。樓船也、明律考駕送黃馬並に同御座船とす、漢にも一號大

以用法爲名